

私の一冊

看護学科 長澤利枝 先生

阿部編集事務所編 『東京古き良き西洋館へ』

小鹿図書館 : 523.1/To 46 (淡交社)

いつ頃からか、私は西洋館に対して大いなる魅力を抱くようになった。特に、明治～大正～昭和初期頃に建てられた建物には、明治維新以降西洋の文化を貪欲に吸収し、自由な息吹を日本風土の中に根付かせた時代の気運が窺われて、心惹かれるものがある。

そのためか、大学時代は横浜山手の丘に建つミッション系の女子大で学んだ。当時、大学の建つ山手の丘には、港の見える丘公園～横浜外国人墓地～山手カトリック教会にかけての道沿いに、各種西洋館 が点在していた。また、横浜港近くの海岸通りに沿って、ホテルニューグランド～横浜開港資料館～日本郵船ビル～各種銀行等の石造りの古き西洋建築が多く見られ、銀杏並木が黄金色に色付く頃には異国情緒が一層強く漂っていた。少し授業が早く終わった日の午後には、1人遠回りをしてそれらの西洋館を眺めながら散策するのが、私の秘かな楽しみであった。

その後、10年余を経て東京・本郷にある大学病院に勤務することになり、特に上野～本郷～お茶の水界限にはよく出かけるようになった。本書の中で紹介されている、旧岩崎邸庭園洋館、国立国会図書館国際子ども図書館、山の上ホテル等を眺めながら歩いた記憶がある。特に、大学構内南側の龍岡門から出て、大学構内と外部とを隔てた赤レンガ塀に沿って、初めは緩やかで途中からやや急な坂道を下っていくと、丁度旧岩崎邸庭園洋館の裏側にたどり着く道が気に入っていた。この坂道は「無縁坂」ともいい、森鷗外の小説にも登場する、さほど広くはない石畳のやや急な坂道であった。夜勤明けの日に、上野方面へ買い物に出かける途中、よくこの坂を下っていった。その際、片側に続く家々の塀や生け垣の合間からのぞく、庭木の緑に心和む思いがした。また、坂を下り終えたところにある旧岩崎邸庭園洋館(当時は改修工事中)の様子を高い塀の間から垣間見るたびに、館の全貌はどうなっているのだろうかとあれこれと思いを巡らせたものである。

本書によるとこの旧岩崎邸庭園洋館は、明治29年、イギリス人建築家ジョサイア・コンドル(旧古河邸本館等、明治～大正期にかけて多くの洋館を建築)によって、三菱財閥三代当主岩崎久彌の本邸として建てられた洋館で、コンドル壮年期の代表作とのことである。広々とした芝生が続く庭に面した、建物東側の一階全面がサンルームになっており、開放的で優美な

佇まいを見せている。

本書の中には、都内各地に残された様々な西洋館（レストランになっているものも含む）が紹介されており、古き良き時代の息吹とロマンチズムを垣間見ることができる。私もまたいつか、この本を片手に上野～本郷界隈や、都内のまだ見ていない西洋館を巡ってみたいと思っている。